

社会的文学から社会政策へ

— 横山源之助の回転 —

本 間 道 雄

On Gennosuke Yokoyama's Conversion of Social Literature to Social Policy.

by Michio Honma

一、工場法と「職工事情」

わが国最初の包括的な労働者保護法は明治四一年（一九〇八）第二七帝国議會を通過し法律一六号として公布された「工場法」であろう。しかしながらその内容は工場経営者（特に生糸・綿紡績工場）を中心とする猛烈な反対とこれに同調する枢密院・貴族院・をはじめとする一部政官界の旧勢力によって大きな修正が加えられた。もっとも重要な工女・年少者の徹夜業禁止規定の如きは実施を十五年後に延期されて実質的にその効果を失ったに等しい。この程度法律でさえ成立するまでには驚くべき長年月を要したのである。すでに明治十五年、農商務省は工部局に調査課を設け、工場及び職工の状態慣行を調査している。⁽¹⁾ つづいて明治二十年六月、職工条例及び徒弟条例案を作成している。これは一八六九年ドイツの營業条例 Gewerkeordnungs を模したものであり当時の日本には進歩的でありすぎたようである。そのためこの案は陽の目を見ずに終わった。その後、近代的な工場制工業、特に生糸業・綿紡績業の近代化に伴いその原生的な労働関係の矛盾が露骨に現われるようになった。明治二九年（一八九六）に設立された日本社会政策学会の以後十余年間の研究並びに実践活動の主要目標は労働者保護法Ⅱ工場法の制定であった。⁽²⁾

表一 繊維工業労働者数の推移

年度 業種	明治19年		明治20号		22年	24年	25年
	職 工	傭 人	職 工	傭 人	職 工	職 工	職 工
製 糸	47,216	3,033	36,719	27,881	69,103	57,760	68,783
織 物	5,194	494	11,192	648	23,029	24,300	23,176
紡 績	1,877	—	3,381	115	14,025	22,651	29,103
その他	118	142	645	250	3,629	2,164	2,214
計	54,405	3,665	51,947	28,894	109,786	106,875	123,276

統計年鑑第7～第13による。

※明22年以降は傭人（日傭労働者）も職工数に含む。明治22年以降は資本金1000円以上の事業所のみを対象とする。

一方、個別資本の側にとっても、原生的労働関係における種々の矛盾は次第に放置し得ない状態に立ち至った。

その一は労働者磨消的な劣悪な労働条件に起因する生産効率の低下であり、さらに労働者の疾病等による質的低下であった。これに關してはキリスト教關係をはじめとする宗教者の批判や一部の学者からの人道主義的な批判が起った。桑田熊蔵博士はのちに、一種の擬装倒産に類似する方法まで用いて賃金の不払いを行った信州地方の生絲工場の例等を挙げて「工場主の手段の狡猾なる、悪みて尚ほ余りある事と云ふべし」と憤っている。⁽³⁾

その二は労働者募集費の激増による利潤の低下である。これはひとつには労働者、特に年少女子労働者、生糸紡績工場工女の激増であり他は労働条件の甚しい劣悪さに対する労働者の忌避である。工場側は専門の募集係を置き（募集費用の上昇を招く一因）甘言詐術を弄し時には暴力で年少の工女を獲得した。これはやがて工女の家族や近隣の知るところとなり「……一般ノ機業地ニ於テ土地ノ者ハ機場ノ状況ヲ知悉スルヲ以テ之カ父兄タル者ハ其弊風ヲ知リツツ子女ヲ工女ト為スヲ好マス桐生足利美濃地方ノ住民カ其兒女ヲ叱咤スルニ惡戯ヲスルト機屋奉公（工女のこと）に遣ルト云フコトヲ聞ケリ」というほどになった。その結果、工女の募集地は次第に工場から遠隔の地で工場の実情の知れていない地方になり、このことがさらに工女募集のコストの上昇をもたらした。このことは個別資本の側にとつて更に悪い条件を生むことに至る。工場はついに他の工場の獲得した労働者を掠奪し、現有の工女の引抜きを行うに至つた。この不毛の泥仕合からの脱却は労働者の定着性の向上以外になつた。

年少労働者、特に次代の母世代の年少女子労働者の結核による死亡数の激増と労働者の弱体化は恐るべきものであつた。

表二 寄宿女工病類別表（明三六年農商務省工務課工場調査係）

工場 病類	紡績	製糸
伝染病	12.2%	18.4%
発育及び養	5.6	2.7
皮膚病	3.4	1.7
血行器病	0.1	2.6
骨肉節病	4.3	0.5
神経系病	11.7	15.8
呼吸器病	25.5	22.7
消化器病	30.6	30.0
泌尿器病	2.1	3.8
外襲性病	3.9	1.7
中毒症		0.3
不詳	0.03	

これが正常な資本の増殖・発展を阻害することは明らかであつた。一方、次代の母性弱体化特に精強なる帝国陸海軍の下士官兵の供給源であ

る農村地帯の壮丁の体力の低下、戦闘力の低下は国防上の由々しい問題であつた。若き公衆衛生学者、石原修医師は緻密な実証的な研究に基いて報告している。石原修「女工と結核」に言う。「工業の為に犠牲になつた所の女工の数は奉天戦争の死者或は傷者の数に相当するのではないか：（中略）：工業が盛んになつた為に其以前の人と比して體質を痛め壮丁の体格を悪くしたと思います」と。工女の出稼↓結核↓帰郷↓「農村結核」の恐怖を強調している。これらは国防上の必要性に藉口して労働者保護の目的を達せんとしたものと考えることができよう。

生産性の低さを労働者の磨消耗の使用によって代替しようとする後進的資本主義と絶対主義的官僚の「工場法」阻止に対してまた別の面から工場法の成立を促すものもあつた。前述の日本社会政策学会や先進的資本及び一部の合理主義的改良主義的官僚であつた。即ち労働力の再生産を不可能にすることは資本自体にとつてもその存立を危うくするものであること、極端に長い労働時間や深夜業が労働の質の低下を来たしその上機械の損耗を大にすること、従つて利潤率の低下を結果することなどを報告する政府の調査がある。ここに資本主義経済に於る合理的な労働者政策、労働の保全政策の確立の第一歩としての工場法、工場労働者に対する包括的保護への動きが漸く具体化したのである。時に明治三十三年であつた。これより前、明治三十一年にすでに工場法案が第十一帝国議会で提出されたが廃案となつてゐた。三三年には農商務省工務局工務課に臨時工場調査掛を置き工場労働の状況を調査する事となつた。

これは工場法の施行を目指してその基盤としてわが国の工場労働の現状を実証しようとするものであつた。予算一万円が計上され、のちこれが打ち切られてもなお調査を続行したことによつても関係官僚らの情熱が窺える。工務課長窪田静太郎の下に臨時調査職員を置き囑託には法学博士桑田熊蔵・学習院教授久保田無二雄等がいた。彼等は各地方の各種の工場に赴き刻明に調査している。その方法は極めて科学的実証的であ

る。「工場法」の成立を期してなされたこの調査は「官庁調査に往々見られる歪曲はほとんど見られない。当時の劣悪きわまる労働事情をほとんどあるがまゝに描出しており、労働者に対する同情的立場も示されている。その記述の様式すなわち質においてすぐれたものである点でも古典と称されるに値する」と土屋喬雄博士は評価している。今日読んでもその水準の高さ、広範さ、正確さは驚くほどである。

「おそらく戦前の日本における原生的な労働関係を刻明に記録した殆ど唯一の権威ある調査報告書であろう」⁵⁾この調査書「職工事情」は明治三六年四月三十日農商務省商工局から発行されている。菊版五冊、計六八九頁に及ぶ大冊である。第一冊は綿絲紡績職工事情、第二冊は生絲職工事情・織物職工事情、第三冊は鉄工・硝子・セメント・燐寸・煙草・印刷・製綿・組物・電球・燐寸軸木・刷子・花筵・麦桿真田職工事情でありこれに附録一・附録二を付している。附録一は、工女の虐待、誘拐私裁、募集、逃走に関する事件について商工局長から埼玉県奈良県大阪府神奈川県その他へ照合して得た回答をそのまゝ記載したものである。附録の二は臨時工場調査職員の「職工事情」作成のため各種工場の当事者、職工徒弟よりの聞き書の一部である。事実の持つ重さは、読む者に強烈な印象を与えずにはおかない。政府作成の調査記録に類例を見ないものと言われるゆえんである。

この「職工事情」は明治三六年に印刷に付され当初は恐らく江湖に広く配布されることが予定されていたものと思われる。しかしながら——その範囲は今日では明確ではないが——極く一部の関係者にしか渡っていない。理由は明らかではないが「職工事情」の「観ル者ヲシテ覚ヘス顔ヲ蔽ハシムル」(織物職工事情)事実や、「短キモ一日(年少の女工の労働時間が)十二三時間ヲ下ルコトナク長キハ十七八時間ニ達スル(生絲職工事情)長時間労働の実態が曝露されることを避けるための配慮からであろうことは想像に難くない。切角の優れた調査報告が直ちに大

きな力となり得なかった事は調査関係者には残念なことであつたろう。しかしこれは議会、識者、ジャーナリズムに少なからず影響を与えた事は否めない。また後年に至って思い掛けず個人に与えた強い感動がやがて結実し波及し拡散して大きな成果を得たこともある。河合栄治郎の場合もそうである。河合は言っている「この本(職工事情)に於て私は始めて日本の工場及び職工の状況を知ることが出来ました。けれども私が特に心を惹かれたのは其の附録二巻であります。此の二巻は日本の官庁で公刊された書物としては類例ない位の特質を持って居ります。それは此の書が日本労働者の悲惨なる事実を集めたからでありまして私共は此の二巻を涙なくして閉ぢることは出来ないであります。(中略)漠然として抽象的であつた私の志望は比に於てか明白な曙光を見出すことが出来ました。自分は農商務省の官吏として工場法の実施に参与したいと云ふ志望を決定したのであります」⁶⁾

それまで内務省が大蔵省を志望していた河合が労働者保護行政を——工場法の施行を志向するようになったのはこの「職工事情」を偶然の機会に一読したことによるのであつた。のち彼は再び方向を転じて東京帝国大学の経済学部(7)の講壇に立つに至るが、こゝで彼は社会政策を長く担当することになる。彼は社会政策の目的は「社会の各成員の人格の円満なる発展」であるとする一種の人格主義的な立場をとっている。これに傾倒する学生も多く、また一方、大河内一男のようにこれに同調しないながら、これを手がかりとして、これを超えて社会政策学の完成へと生涯を捧げる弟子も出たのである。(7)このような河合を形成したについて「職工事情」の果たした役割は重い。

さてこの「職工事情」作成のために「足で調査して歩いて調査してまとめあげた」⁸⁾臨時工場調査掛囑託の一人に作家・ジャーナリスト、横山源之助がいる。

二、横山源之助 その生いたち

横山源之助については社会調査の名著「日本之下層社会」及び「内地雑居後之日本」の著者であること以外に多く知られていなかった。横山の著書は一九三〇年代以後は第二次大戦終了時まで入手が困難であったため研究者も少なかった。まさに「埋もれた人」であった。横山源之助の生涯と著作について研究の端緒を開いたのは西田長寿氏である。⁽⁹⁾横山の新聞記者時代、一時かなり親密な交りを結んだ内田魯庵は横山を評して言っている。

「無軌道の惑星で終に何等の足跡をも残さなかつたが此の人生の『アンフィニッシュド・ピルグリメージ』 Unfinished Pilgrimage の遍路修業者も数奇伝の一人として後世に伝ふべきであらう」と。⁽¹⁰⁾

横山はまずその出生からすでに甚だ不明瞭である。明治四年（一九七一）二月二日、富山県新川郡魚津町大字神明町九八番地に生れた。（魚津市役所の戸籍による）。出生後、直に横山家の養子となっている。養父は伝兵衛、腕のいい左官職で経済的にも不自由のない暮らしであったらしい。この間の事情については横山の年少時よりの友人で、横山の出生からその前半生を知っているたゞひとりの人、黒田源太郎の「炉辺夜話」の中の「魚津の人が知らざる横山源之助君」⁽¹¹⁾に「君は明治四年九月（戸籍と異なる）魚津某資産家の子と生れ、故ありて産褥の上より横山家の養子となり、…」と書いている。

故ありてとは何か。西田長寿氏は「彼は魚津のある網元とその家の若い女中との間に生れた子であるが世間体や家庭のことを考えて女の妊娠中に宿へ下げた」⁽¹²⁾としている。このことが横山が生涯、被抑圧者の側に立つことになった一つの要因であったと言えよう。彼は養父母、伝兵衛、すい夫婦に実子以上に愛され（のち実子、一男三女を得た）明治十八年創立間もない富山県立尋常中学校に進んだ。職人としては比較的経済的

に余裕があると言っても明治十年代の北陸で中学校へ進学するのはまことに希有のことであった。これは横山が学業が優れていたことにもよるうが、また小学校を卒えてから短期間、近隣の正油醸造業者の徒弟となつた際に商人としての不適格がはっきりしたことによるのであろうか。横山は後年、「貪しき小学生徒」という小説を書いているがここで、身分不相応な小学生の進学の問題を扱っている。この時代の彼自身の体験に基づくものであろう。

横山は富山尋常中学校に入学して一年経つや突然、友人と共に無断退学、上京している。時に明治十九年（一八八六）であった。

これは前述の「貪しき小学生徒」のような、身分不相応な上級学校への進学による心理的圧迫ということも想像されなくてもないが、その後の彼の奔放な生き方などから推して、また明治前期の「政治の季節」とも言うべき社会的状況を考えると、いわば青雲の志に燃えての出走であつたのであろう。

上京後、彼は英吉利法律学校Ⅱのちに東京法学院（現中央大学）に入学し弁護士になるために法律学を学ぶ。

明治十七年は秩父事件があり翌十八年には大阪事件があつた。また三年の後には憲法の発布、つゞいて帝国議会の開設が迫っていたのである。彼は弁護士——政治家の道を夢みていたのであろう。

彼は二四年まで東京法学院に在学していたと推測されるが確証はない。

⁽¹³⁾ 東京法学院Ⅱ中央大学の卒業生名簿中にもその名を見出し得ない。

横山は弁護士試験を何回か受験して失敗している。これはのちの横山の著書や行動から推して、法学の試験勉強のような性質のものは彼には甚だ不適合であつたと思われる。また一方、当時すでに弁護士の業務の内容も漸く専門化し初期の「代言人」の時代とは異りかなり高度な法律の専門知識を要求されつつあつた。その上、当時、東京専門学校（明治十五年）和仏法律学校（明治十三年）明治法律学校（明治十四年）

専修学校（明治十五年）等の私立法律学校が設立され法学生過剰時代が突然現出したのである。加えて、養家横山家の没落という事情もあって彼は弁護士になることを放棄した。横山家の家運が衰えたのは、源之助の学資の負担ということもその一因であったかもしれない。もともと地方都市の左官職の経済力には東京遊学は過重であったろう。

この明治二十四年に横山源之助は二葉亭四迷を突然訪問している。

これが明治二十四年であるか否か、横山が書いている。「僕は長谷川君に逢ったのは何年頃であつたろう？ 瞭然とした記憶はないが、なんでも錦町（神田）の今井館に下宿していた時であつたように覚えていて。

僕は其の頃谷中初音町の植木屋に陣取り弁護士試験の下調べに浮身を裏していた。権利義務に黄いろい嘴を尖らしていた僕が『浮雲』の著作で一躍して大家の名を博した君を尋ねたのが不思議であつた」¹⁴

彼は紹介状もなく二葉亭に面会を求めたのであつた。この時が明治二十四年と確定できるのは二葉亭が神田錦町今井館にいた期間は二十四年初夏の頃から同年の十二月三十一日に神田東紺屋町に移るまでの半年ばかりであることがわかつているからである。¹⁵

この時から横山源之助と長谷川二葉亭の交遊は二葉亭が明治四一年六月ロシアに向う時まで続く。四一年六月十二日夜、急行列車で新橋を発つ二葉亭を送って横山源之助も列車に同乗し国府津まで行った。¹⁶ 横山は文壇には友人の少い二葉亭のわずかなそののひとりであつた。

翌四二年五月二葉亭はベンガル湾洋上で四五年の生涯を閉じた。

この二葉亭との交遊が横山に文学上、思想上、また人間関係の上で多くの影響を与えた。

三、二葉亭四迷と横山源之助

長谷川辰之助Ⅱ二葉亭四迷は元治元年（一八六四）尾州藩江戸上屋敷

内に生れた。のち郷里の名古屋に移る。更に父、吉数が島根県属として松江に転ずるに従う。十五歳、東京へ帰るまで松江に在住する。この間維新前後の激動は幼少年期の辰之助に国家・社会への関心を育む因となった。名古屋でも松江でも漢学塾に学んだ。特に松江で学んだ内藤友輔の影響は大きかつたようだ。この儒教的な基礎的な教養を基調としてその色彩の上にのちの近代西欧的な知的な陰翳が画かれているのが彼の精神の風景といい得るかもしれない。その出生から青年期までをすべて東京で暮らし、しかも町人的な風土の中で育つた漱石が漢学Ⅱ儒教を単に教養或は趣味として持ち、ナショナルなものを超えようとしたのに反し彼の場合は、いわば儒教は血液として底流に流れていた。そしてそのことが後に彼の東洋的な気風とロシア文学を通じて獲得された西洋的人間観、社会観の混在・相剋として現われるのである。

二葉亭の朝日新聞社員時代にはじめて彼に会つた漱石は「其時、余の受けた感じは品位のある紳士らしい男——文学者でもない、新聞社員でもない、政客でもない、あらゆる職業以外に厳然として存在する一種品位のある紳士」と評している。¹⁷ この漱石の初対面の印象も二葉亭の持つ不統一な性情と志向を看破したものと言べきであろうか。

二葉亭は幼少年期は特に文学的な嗜好を持つた訳でもなく文芸的な環境に恵まれたわけでもない。東京で寧ろ下町の気風の中で成長したようである。が一面、彼は国家・社会というもののへの関心も強くそれ故、国家の命運に関わることを男子の仕事と考えたのであろう。彼はのち陸軍士官学校を三度受験して不合格となっている。

明治十四年、十七歳の時東京外国語学校露語科に入学する。当時この学校には給費制度があり多くの学生はこれを目指して入学を希望したが二葉亭はちがつていた。彼はロシア語を修め外交官にでもなろうという考えが強かつたようである。彼は勉強に極めて熱心であつた。

「全く自身から一身を打込んでの勉強であつた。よく夜更けて人の寝静

まるのを待つて自分の好きな書物を心しづかに耽読するといふ風で一冊の書をはみらず初めから終りまで読み通さねば承知しなかった」¹⁸⁾と当時の学友は云っている。したがって成績も殆ど一番を通した。

この学校に在学中（明治十四年から十九年一月退学するまでの約五年間）彼が受けた教育はまことに特異な、そして高度なものであった。当時の東京外国語学校露語科は教科書は全てロシア語のものをを用い講義も全部ロシア語であった。ロシアの中学校の第一級の教育を日本に於て、日本人に対して与えたことになる。幼少年期に素読から入り漢学を厳しい注入的方法で学んだ学生はこゝでまた同じ方法によるロシア語と近代西欧的な教養の修得に耐えた。それは幕末の鳴滝塾や適塾の塾生達が漢学を学んだ経験が蘭学の学習に大いに役立ったと同様である。

教師にも特異な才能・性向の者が多かった。主任教授メチニコフはイス国籍の亡命者であり、ニコライ・グレーは母国ロシアの専制政治を痛烈に批判して止まない文学者であった。日本人の教授では市川文吉がいた。市川は旧幕臣の洒脱な江戸っ子で在露十数年の経歴をもっていたが生涯、明治政府と薩長の高官に反感を懷きつづけた。一切の官職を拒みつづけて孤独の中に八十才の生涯を閉じた。古川常一郎も狷介なこと殆ど市川に異なることがない。

また、グレーは毎時間、レールモンツフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、トルストイ等の作品を名調子で朗読し、学生はこれに聴きほれたと言う。

この朗読のあとで学生に作品、作中人物の批評をさせたという、すぐれた外国人による外国文学の直接外国語による授業は学生に外国文学への深い理解と強い興味を起さないわけはなかった。

斯くして二葉亭の中に一方に社会的関心と叛骨の気風と、一方に文学への傾斜を生じさせることになるのである。そして政治と文学、文学に於る社会性という問題を二葉亭は生涯負いつづけることになるのである。

明治十九年、二葉亭は卒業を目前にして外国語学校を退学する。それ

は一つには外国語学校が学制の改革で東京商業学校露語科に改組されたことに対する反対からであった。またこの前年、父吉数は三等主税属を最後に官を免ぜられた。二十二歳の二葉亭には一方には煩わしい家族の問題と経済的負担が、一方には新しい文学に対する燃えるような野心と情熱があった。

このような時に二葉亭は坪内逍遙にはじめて邂逅することになるのである。逍遙は当時二七歳、すでに東京専門学校で英文学を講じる新進の学者であり、且つその前年には「当世書生気質」を、つづいて「小説神髓」を出版し文壇に新しい一石を投じていた。二葉亭は経済的な不如意と家族関係の柵と鬱勃たる文学への野心で苦しんでいたが「書生気質」を読んで大いに感動し本郷真砂町に逍遙を尋ねた。明治十九年一月十九日であった。この時、二葉亭は「小説神髓」の不審点を問い、ロシアの文学を語り逍遙はこれに答えた。また「文学と社会」についても語りあった。

「この日二人の対面の間に、この時の日本の文学の一番進んだ考へが初めてその姿を現はしたのであった」¹⁹⁾これから殆ど週一回ぐらいの割で二人の対面はつゞく。二葉亭は逍遙によって文学への情熱をますます掻き立てられ、一方逍遙はこの年下の無名の青年の文学に対する真摯さ、新しい文体、批判精神に刺激されもし恐れもした。

二葉亭は翻訳を二三逍遙に示した。そして初めて逍遙に会つてから三ヶ月ほど経ったころ、ツルゲーネフ「父と子」の部分訳、一〇〇枚ばかりを逍遙に手渡ししている。これは「虚無党形気」という題名で出版の予定であったがついに出版されなかった。事情は不明である。これが口語体の最初の訳文であった。その後近代日本の小説の金字塔であり社会的な秩序との相剋に悩む近代的自我の問題を取り上げた作品「浮雲」が明治二十年に出版された。これはまた、文体の上からも大きな意味を持っている。もつともこの言文一致体は「江戸戯作者系の作家のような文体で」うまく書くことが、かれ自身にとつてはもとむづかしかったから²⁰⁾だという。しかし近代的人間像としての主人公「文三」を画くに

は言文一致体の誕生は必然であつたに違いない。そしてそのことが文学の先輩である筈の逍遙に重圧となつてのしかゝつて来た。逍遙が自己批判の思いにかられて「只管真実を旨として、人生の觀察に従せんと思ひ定む」と日記に書いているのもこの頃のことである。

しかし「浮雲」は當時は一部では奇妙な作品として受取られもした。いわば、季節が早すぎた、とも言えよう。しかし石橋忍月のように「嗚呼、維新以来小説多しと雖も浮雲に及ぶものはあらざるべし、予は浮雲を以て明治年間無比絶群の一大傑作と尊称せんと欲す」と激称する者も少からずあつた。さらにこれに続く翻訳によつて文学者としての地位は確かなものとなつた。

四、社会的文学と横山源之助

二葉亭四迷が或る日突然、新進の文学者坪内逍遙に面会を求めたように、横山源之助は何の紹介もなしに新進作家二葉亭四迷を神田の下宿に訪ねた。これは「浮雲」の三篇合冊本が出版された年である。法学生横山源之助は既に法曹界への夢を放擲して次第に文学と社会問題に傾斜の度合いを深めて行きつゝあつた。

以来、彼は疎・密の変化はあつたが交りを断たず二葉亭から文学と社会問題意識の影響をうけつゞけるのである。また、二葉亭の下で後に横山の生涯に影響を与えるような人々に遭つた。矢崎鎮四郎・嵯峨の屋お室、松原岩五郎・二十三階堂、内田魯庵等みなそうである。

彼が小説「貧しき小学生徒」（民友社「家庭雑誌」）を書いたのは矢崎嵯峨の屋の勧めによるものであつた。松原二十三階堂は桜田文吾と共に当時すでに貧民窟ルポタージュに才腕を発揮していた。いわば横山の下層社会ルポタージュ文学の先達であつた。内田魯庵は横山の就職等にも関わり、その後も終生交遊が続いた。

横山源之助は明治二七年十一月ごろ毎日新聞社（社主島田三郎）に入社した。

しかし彼がこゝに正社員として籍を置いたのは一年位でしかない。入社後わずか二ヶ月ほど経つた二八年一月二五日の書簡で二葉亭は早くも内田魯庵に対して横山の就職の依頼をしている。

「：横山事御承知の通の人物ゆえ是まで社の折合あまり宜敷からざる由兼而咄有之候ところ此度遂に放逐被致候就ては小生に身の振方相談致候へとも：」²²⁾とあるがこの時はまだ退職はしていなかつたようである。

入社後最初の記事は「戦争と地方労役者」²³⁾で、天涯茫茫の署名で書かれている。これは日清戦争下の労役者（職人、工員、人夫等）の生活の悪化と貧富の差の拡大の様子とを地方在住の友人が「夢蝶君（横山の筆名の一）近況如何に候」という書き出しで戦時下とは思えぬ激しい口調で批判する形式で書かれている。かなり感傷的乃至感情的ではあるが、よく事実に向つて書いている。また数字を挙げていて説得力も大きい。当時の新聞記事の水準、社会探訪記事の水準からいえば出色ということができよう。後年の労働調査の端緒はすでにこゝにあった。これに続いて「社会の觀察」「都会と田舎」「最近の木賃宿」のような社会探訪記事、「とりまぜいろいろ」のような文学評論、更に「幸田露伴と語る」

「坪内逍遙と語る」「対話佐久間貞一君」の対談記事を書いている。佐久間貞一は日本で最も古い活版印刷会社秀英社社主であり工場法制定運動に情熱を傾けたいわば開明的経営者である。「わが国労働運動の大恩人にして、日本のロバート・オーエンといふべき人」と片山潜に言われている。²⁴⁾横山はこの佐久間に、のち篤い支援をうけて労働調査を行うことになる。名著「日本之下層社会」には「故佐久間貞一先生ノ記念トシテ斯ノ書ヲ捧グ」と献辞がある。

やがて横山は毎日新聞社を退社する。これは社主島田三郎との関係が旨くいかなかったのかもしれない。のち横山は島田には恩義を感じつゝ

も好意を持つことができないことを述べている。たゞこの退社の時期は確定し難い。退社はしたが、彼の記事はかなりの頻度で毎日新聞紙上に掲載された。

明治二十六年頃から貧民窟の探訪記事が出るようになった。大我桜田文吾「貧天地饑寒窟探検記」松原二十三階堂「最暗黒の東京」のようなものであった。これらは多分に猟奇的な「読物」であつたが、資本主義の生成期の社会的な矛盾のもっとも尖鋭に現われる社会底層の記録という意味では評価するべきであらう。横山も後年この頃の文学の傾向を評して「社会的傾向を帯べりと称せらるる某々文士出づ。即ち神の如くユーゴーを崇拜せる原抱一庵と、西鶴の「文反古」「胸算用」に随喜せる松原二十三階堂の二人となす」と書いている。横山は自分が生きて来た社会と思ひ合わせて、また親交のあつた松原二十三階堂でもあり、社会的な文学——社会ルポルタージュへの傾斜は次第に強まつていった。彼の社会に対する関心については師事した二葉亭四迷の影響も大であつた。二葉亭は明治二年八月（二五歳）から三十年十二月（三三歳）まで八年間、内閣官報局に勤務し英・露の新聞を翻訳していたが、英国の労働事情に関する記事など特に採り上げることが多かった。また二葉亭は、殆ど変装に近いような扮装で下層社会に出没した。これらは彼の韜晦趣味でもあり社会への強い関心からでもあつた。これらも横山に影響したことは当然であつたらう。

これからの横山の書くものは次第に社会探訪——それも単なる猟奇的なものから事実の正確な蒐集、社会的視野からの分析へと変化してゆくのである。しかしそこには単なる事実の報告ではなく彼の文学的な情熱が随処に露出する。

明治二十九年から横山は俄かに活動的となる。三月十五日「新聞社へでも出仕為さるやうな、と宿の婆が申候を後ろに聞いて、十一時十五分の汽車にて唯今宇都宮へ到着」したという出発の日から四月二十日頃まで

の間、桐生・足利・前橋の機業地の労働事情の調査を精力的に行っている。これは「文明を謳うを喜ばざる者」「地方の木賃宿」「機業地の側面」などとなって「毎日」紙上に飾った。のちに「日本之下層社会」にあるものは録される。

帰京後、六月まで調査結果を新聞に連載したか、八月には早くも第二次調査行に出発している。今回は小作人事情の調査である。資本主義的生産様式の一般化の過程での北陸（彼の郷里の富山県下）の農業の実情を冷静な科学的な眼と郷里農民に対する愛情とで画いている、これは「日本之下層社会」第五編「小作人生活事情」として結実する。この二回の調査行の間に横山は桶口一葉を何度か訪ね、手紙も書いている。

横山の郷里滞在は十ヶ月近くになった。彼は明治三十年五月、当初からの計画に従ひ金沢、福井を経て大阪、神戸の労働事情調査に出発した。第三次調査行である。これは「北陸の慈善家」「加賀の工業」「九谷焼」に更に「大阪工場めぐり」（大阪製燐株式会社、島田硝子製造会社、瓦斯糸紡績会社をはじめとして計二十三工場）の調査となる。これらは六月末から十月二十七日までの間の毎日新聞に掲載された。そしてこの「下層社会」及びそれとならび称せられる労働調査の名著である「内地雑居後之日本」の根底をなすものである。

大阪の工場調査を終つた横山は明治三十年十月末までには帰京した。これら三次にわたる調査は実証的であり刻明な調査・面接・研究に基くもので膨大な量の資料となつた。帰京後彼はこれらの資料を整理し、再構成して「日本之下層社会」及び「内地雑居後之日本」の二書として出版した。前者は三二年四月教文館から、後者は同年五月労働新聞社から出版された。何れも当時の労働調査、労働問題の著者としては極めて水準の高いものと言える。近代日本の社会調査の仕事としては群を抜いたものであわう。特に「下層社会」はその実証性、科学性、と共に「価値の最大のものである。単に個々の労働階級を具体的に詳細

に捉えているのみならず、あらゆる階層を全体として捉えている」²⁷ 点は評価するべきである。

こゝにおいて、横山源之助は文学から社会問題へ、社会政策へと転回を遂げたのである。しかしながらこの、わが国「初の本格的な労働調査」(土屋喬雄博士)は横山の文学者的な資質によるのか、社会正義の情熱のためか処々に文学的な表現が見られこの不統一がまた一種の魅力をなしているのである。

五、「職工事情」作成への参加

明治三十年、高野房太郎・城 常太郎等により職工義友会が生れ、初期労働組合運動に発展する。横山は、この最も早い時期から彼等の運動に加わりその機関紙「労働世界」に執筆しつづけた。しかし彼は前記二著の完成と三次にわたる苛酷な調査活動により健康を害し、三三年八月に郷里、富山県魚津に帰った。

明治三十年ごろから工場法制定への動きがいよいよ盛んになった。とりわけ開明的な官僚や進歩的な学者の間にはその早急な施行を要望する声が挙った。しかし政府・議会は産業、特に綿紡・生絲業界の意向を慮つて「工場法」の制定に消極的であった。そこで農商務省商工局の官僚達は工場法制定の必要性を労働者の劣悪な労働条件を実証し、提示することの必要性に思いついた。明治三三年農商務省の工務課に臨時工場調査掛を置いた。これに臨時工場調査職員を嘱託として置くことになった。

法学博士桑田熊蔵もその一人であった。この桑田と同じ日本社会政策学会員であった高野房太郎は嘱託として、当時魚津に帰郷していた横山源之助を桑田に推薦した。横山と高野は「労働世界」への寄稿者として旧知であり、高野は横山の労働調査の卓抜なこと、内容の正確なこと、方法の科学的なことなどを高く評価していた。工場調査掛の行う調査に

は横山を描いて他に適任者はないと考えた。

斯くして横山源之助は日本社会政策の基盤的調査となる「職工事情」の作成に関わることとなる。そして横山源之助こそはこの調査に最適の人物であった。調査の構想、統計的方法、面接による聴取り、公正で官側あるいは資本の側の立場に左右されない態度、しかも眼を被わしめるほどの苛酷な労働条件を正確に描出する筆力、これらはまさに横山のものである。

この臨時工場調査嘱託という仕事に彼は情熱をもってすゝんで参加したものと考えられる。というのは、彼は明治三三年夏帰郷以来、新聞記者をやめて帰農したい、と考えていたらしい、少くとも郷里に永住したいと考えていたようだ。それが高野房太郎、桑田熊蔵博士の招きに応じ直ちに工場調査に参加したことを以てしても彼の積極的な態度が窺知できる。「新聞記者を廃して農に帰らんと決せるなり。当時其の不可を称えたるは君(高野房太郎)にして……博士桑田熊蔵氏相謀り農商務省の工場調査に係せしめたり。……嗚呼余は君を忘るること能わざるなり」と横山のこの仕事への熱い思いが感じられる。

横山がこの仕事に携わったのは明治三三年五月ごろから三四年三月頃までの十ヶ月位であったと考えられる。当時横山が寄稿していた「労働世界」の記事から推測される。また臨時工場調査掛が明治三三年四月に勅令一四九号により設置されたことも符節が合う。

斯くして明治三六年四月、恐らくその影響力の大きさを恐れて、配布先を極く小範囲に限定された「職工事情」が発行された。これは全五冊総頁六八九頁に及ぶ大部の、わが国で初の総合的科学的な労働調査であった。土屋喬雄博士は「官庁調査に往々見られる歪曲はほとんど見られない。様式すなわち質においてすぐれたものである点でも古典と称するに値する」と評価している。

その影響力も政府の憂慮したようになり強いものがあり工場法の成立に少なからず影響を与えたと考えられる。また前述の河合栄治郎の場

合の如く次代の社会政策への強烈な刺激ともなった。

横山源之助が関係したのがこの「職工事情」のどの部分であったか。

資料的な性質の物である故、それを確定することは殆ど困難であるが、

「職工事情」附録二（工場関係者、特に徒弟・職工に対する面接調査）

に富山・石川・福井県地方がかなり多い。これは横山の調査ではないかと推測されるところがある。横山が調査を終了して帰京したことを「労働世界」の英文欄は He has been engaged in the investigation of

spinning factories in north……と書いてゐるところからも推量し得る。

「北」は北陸を指すのであろう。

斯くして横山源之助は近代日本の労働調査の最高峰の完成に参加し、

日本社会政策学の基盤的作業を担ったのである。

魚津から法曹を目指して上京し、社会的文学に向い、二葉亭の影響を

うけ、高野房太郎と共に労働問題に関わりながら彼自身は次第に転換、

脱皮を遂げたのである。（彼の労働組合運動との関係、それからの離脱

等については稿を改めて論ずることがあろう）

了

註

- (1) 拙稿「法の理想と現実との齟齬」千葉敬愛短期大学紀要第7号
- (2) 「工場法と労働問題」日本社会政策学会史料集成第一巻 四五頁
- (3) 桑田熊蔵「工場法と労働関係」 三五〇頁
- (4) 「職工事情」生活古典叢書版 一八〇頁
- (5) 前掲書「職工事情について」大河内一男 三頁
- (6) 河合栄治郎「労働問題研究」 一八〇一九頁
- (7) 大河内一男「暗い谷間の自伝」 六頁
- (8) 「職工事情」生活古典叢書版 一六頁
- (9) 西田長寿「日本之下層社会・の成立について」歴史学研究 一六一号（一九五三年一月号）

- (10) 立花雄一「評伝 横山源之助」 五頁
- (11) 前掲 立花雄一著 八頁
- (12) 西田長寿 前掲論文
- (13) 前掲 立花雄一著 二二頁
- (14) 横山源之助「二葉亭四迷」横山源之助全集 第三巻 二八〇頁
- (15) 中村光夫「二葉亭四迷」 一七九頁
- (16) 伊藤 整「日本文壇史」第十二巻 二六六～二六八頁
- (17) 漱石全集第八巻（岩波昭和四一年版） 一四七頁
- (18) 中村光夫 前掲書 四六頁
- (19) 伊藤 整 前掲書 第二巻 五頁
- (20) 小田切秀雄「二葉亭四迷」 一三六頁
- (21) 伊藤 整 前掲書 四四頁
- (22) 立花雄一 前掲書 六四頁
- (23) 横山源之助全集 第一巻 三四三～三六一頁
- (24) 大河内一男「日本労働組合物語」（明治編） 三六頁
- (25) 横山源之助全集 第三巻「社会文学を評す」 六〇七頁
- (26) 前掲 全集 第一巻 八八頁
- (27) 「日本の下層社会」岩波文庫版解題 三四七頁
- (28) 前掲 全集 第三巻 三〇一頁